シノドス国際社会動向研究所メルマガ 20170710

「パリ「アジア会議」での理論報告」

橋本努

4 月 3 日の設立以来、「シノドス国際社会動向研究所」（通称シノドス・ラボ）では、ワークショップの開催やフェイスブックでの公開議論など、さまざまな活動を行っています。

そのなかでも私たちの中心課題は、「新しい中間層の人たちを可視化」することにあります。そのための理論について、これまでメンバーの吉田と橋本で話し合いを繰り返してきました。そして去る五月に、橋本から総合的な枠組みの提案を行いました。これはいわば、「新しい中間層の可視化理論」の第一草稿といえるものです。

この理論はしかし、はたして有効な社会調査を導くのでしょうか。また理論としてどれほど有効なのでしょうか。私たちはいまも議論を重ねています。

そうしたなかで橋本は、フランスのパリで開催された「アジア会議」（第六回、6 月 26 日～28 日）にて、この理論のエッセンスを報告してきました。「アジア会議」とは、アジア諸国の文化・政治・社会等々の諸分野に関心をもつフランス人たちのネットワークです。今年で六回目の年次大会の開催となりました。

（詳しくはホームページをご覧ください：https://congresasie2017.sciencesconf.org/）

私はフランス人のジル・カンパニョーロ先生が組織したセッション「リベラリズムと中国の経済発展」の報告者の人として参加しました。偶然ですが、シノドス・ラボのメンバーの一人である富永京子さんも、このアジア会議で別の報告をしていました。同大会で富永さんにお会いして議論できたことは幸いでした。

私の報告を簡単にまとめると、次のようになります。

「世界価値観調査」において、日本の政治意識の分布を調べてみますと、ほとんどの日本人は、右と左のまんなかあたりの立場をとります。その傾向は、1980 年代以降、ほとんど変化していません。しかし私たちの関心は、二大政党制の基盤を作るために、「中道左派」と「中道右派」を、なんとか意識分割することにあります。ではどのような基準が、政治意識の右と左をうまく分けることに資するのでしょうか。「穏健な保守主義」と「穏健なリベラリズム」は、どのような基準で区別されるのでしょうか。

従来の考え方では、リベラリズムは、権威主義や伝統主義や画一主義に反対する思想とされてきました。例えば朝日新聞の調査では、リベラリズムはあたかも、すべての権威、すべての伝統、すべての同質性に反対する立場であるかのように可視化されます。

例えば、「日本の伝統に誇りを持つことは、個人の自由か、それとも学校で教えるべきか」という質問があります。この問いで、「日本の伝統に誇りをもつことを教えるべきではない」という立場が、本当にリベラルなのでしょうか。あるいは同調査の別の質問として、「個人の権利と公の秩序のどちらを優先すべきか」という問いがあります。この問いで、「個人の権利」と答える立場が、本当にリベラルなのでしょうか。

私たちはそうではないと考えます。現代のリベラルは、「健全な権威」を認めます。「健全な伝統」も認めます。また「健全な同質性」も認めます。つまりリベラルは、あらゆる点で権威・伝統・同質性に反対するわけではないのです。

では「健全性」とはどのような基準でしょうか。私は、この問題に関する基礎理論を構築して、その理論に基づいて「反偏見」「対等化」「反文脈主義」「批判的態度」という四つの基準を提案しました。今回の報告では、それぞれの基準について、どのような質問をするのか、いくつかサンプルを提示し、またそのような質問が、世界価値観調査における類似の質問と比較して、有効でありうることを補説しました。さらに「中国」や「韓国」と比較した場合に、日本における「新しいリベラリズム」が、「新しい中間層」として台頭している可能性を示しました。

およそ以上のような内容を、私は「アジア会議」で報告しました。

私の報告に対してはフロアからの質問があり、例えば、日本でも民主党が政権を取ることができたのだから、そのときの意識分割があったはずではないか。1980 年代に村上泰亮が論じた「新中間大衆」と私の「新しい中間層」はどのように違うのか。「反偏見」の基準は、ジェンダー論が中心なのか。「新しい中間層」のコア・イメージはどのようなものか、などの質問が提起されました。

いずれも重要な論点であると思いました。その場でお答えしましたが、しかし今後も丁寧に考えていきたいと思っています。セッションのあとで、私は会場となったパリ政治学院の中庭で、ハン・サンジン氏からいろいろなアドバイスを受け、さらにその日の夜は、パリのモンマルトルで、ハン・サンジン氏やシム・ヨンヒ氏と、韓国料理を食べながら議論を続けることができました。その日は朝から、とても濃密な時間を過ごしたと思います。

「新しい中間層の可視化理論」については、まだまだ考えるべきことがあります。最も重要な課題は、新しい中間層のコア・イメージを単純化して、インパクトのある形で提起することです。そのイメージを練り上げたうえで、これを「新しい中間層」の「属性」として定義し、さらにこの属性とは区別して、「新しい中間層」の諸々の「態度」についての仮説を立てます。このような構造で理論化するならば、社会調査において、有意義な知見を導くことができるのではないか。そのような見通しを立てています。

また今回、ハン・サンジン氏らとともに、アジア会議の特別企画で、天安門事件の学生リーダーの一人であった王丹（ワン・タン）氏の講演会（天安門事件を振り返る内容）に参加できたことは幸いでした。

さらにハン・サンジン氏が会話のなかで、次のように語ってくれたことは、忘れられません。

「新しい理論を作るというのは、そう簡単なことではないんだ。その理論によって、人々の不満、人々のストレスをすくい上げなければならないんだ。私は自分の「中民理論」について考えるときに、明示的には書かなかったけれども、二つの不満をすくいあげようとしたんだ。一つは地方と地方のあいだの対立関係。もう一つは、自分たちの生活が、中央政治において誰にも代弁されていないという感覚だ。」

「不満をすくい上げる」という意図は、ハン・サンジン氏の中民理論を読んだだけでは見えてきません。けれどもハン・サンジン氏は、こうした政治的な意図をもって理論を作っていたのでした。では現代において、人々の不満をすくい上げる理論とはどのようなものなのか。この問題について、私は粘り強く考えていきたいです。

なおハン・サンジン氏から、私たちシノドス・ラボでの社会調査の質問項目の一部を、韓国の中民理論研究所における調査と共有したい、との申し出がありました。私たちの研究を国際研究として発展させるために、これから調整していきたいと思っています。